

都市景観形成に向けた「まちづくり」ワークショップの実践に関する研究

— 福島市における「おらがまちづくり市民フォーラム」を事例に —

福島大学行政社会学部 今 西 一 男

目 次

- 1 はじめに
 - 1.1. 研究の背景と目的
 - 1.2. 研究の構成と方法
 - 2 「おらがまちづくり市民フォーラム」の概要
 - 2.1. 概要
 - 2.2. ワークショップの企画を具体化する過程
 - 3 「まち歩き」による都市景観認知
 - 3.1. 「まち歩き」の概要
 - 3.2. 「まち歩き」の実践
 - 3.3. 「まち歩き」により認知された都市景観
 - 4 「井戸端会議」で語られた都市景観
 - 4.1. 講演「五感で感じられるまちづくりをめざして」
 - 4.2. 「井戸端会議」における議論
 - 4.3. 都市景観を平易な言葉でどう表現するか
 - 5 都市景観形成とワークショップ
 - 5.1. 実践の方法としての妥当性
 - 5.2. 実践の「まちづくり」としての継続性
 - 6 おわりに
- 謝辞
補注
引用文献

1 はじめに

1.1. 研究の背景と目的

わが国の都市計画に住民参加制度が位置づけられたのは、1968年に施行された現行都市計画法においてであった。そのなかでは、例えば都市計画の案を作成する際の公聴会や、決定する際の意見書の提出など、いくつかの規程が設けられた。しかし公聴会は文字どおり「聴きおく」内容のものであり、意見書の審査は形式にとどまるといった指摘がなされてきた¹。こうした都市計画における住民参加制度は同法施行以来、不

十分さを抱えたまま現在に至っている。

そうした住民参加制度の不十分さを痛烈に批判したものが、都市計画事業に直面した各地の住民運動であった。1960年代から1970年代にかけて神奈川県藤沢市で土地区画整理事業に対する住民運動を行った安藤²は、住民参加という言葉が口にされること自体、「町づくりが住民の立場以外から行われていることの証拠ではないか」と喝破した。

こうした住民運動はやがてハードからソフトを重視した住民感覚をこめた、ひらがな表記の「まちづくり」という言葉を定着させるに至った³。そして地方分権の時代と言われる現代社会においては、行政主体の地域運営型に対する「異義申立て的な運動」から、市民主体の地域経営型の「市民運動的な運動」へという住民運動の質的な転換が指摘されている⁴。

しかし住民による「まちづくり」という言葉が広く言われるようになったものの、具体的な実践の蓄積はまだなお途上にあると見てよい。つまり、いわば参加の技術と呼ぶべきワークショップや、「まちづくり」という抽象的な内容を平易な言葉で語る技術の普及という課題である。その背景には渡辺⁵が指摘するように、「分からない」「まとまらない」「エゴになる」という住民参加の困難がある。それは住民参加という手続き自体は求めるものの、住民自身が参加の技術を身につけることの遅れに関係した困難であると思われる。

また、「まちづくり」という言葉を用いていながら、果してその内実として何を「つくる」のかという点は極めてあいまいなままである⁶。とりわけ、都市環境・都市景観といった長期にわたる調整を必要とする計画課題については、短期にまとめられる事業等とは異なり、住民が参加するというよりは問題発見からまさに「つくる」作業が求められる。こうした住民による自主的な問題発見のとりくみをセットした参加の技術が、現代社会における「まちづくり」では求められて

いると言えよう。

そこで本稿では具体的な事例研究をととして、住民による問題発見と参加の技術の試みを視野に入れた「まちづくり」ワークショップの実践について報告することを目的とする。そうした実践の蓄積がここに提示した住民による「まちづくり」の展開に示唆を与えるものとする。そしてここで取り上げる事例については、以下の二つの視点から分析を行うこととする。

(1) 事例研究で扱う「まちづくり」ワークショップの方法としての妥当性

(2) 事例研究における住民（「まちづくり」ワークショップ参加者）の問題発見の内容に関する検討
都市計画における住民参加との接点で参加の技術について論じた既存研究としては、ワークショップをととしてコーポラティブハウジング建設等の実践に関わった延藤ら⁷⁾、デザインゲームの提案・実践を報告した早田ら⁸⁾の一連の研究等がある。また先述の渡辺⁹⁾らの報告は都市計画マスタープラン策定への住民参加について、その参加の技術を含めて複数の事例を提示している。これらもふまえて本稿では、住民による問題発見と参加の技術の試みという点に着目しながら、分析を行うこととする。

1.2. 研究の構成と方法

本稿で取り上げる事例は、2000年10月から11月にかけて福島市で行われた「おらがまちづくり市民フォーラム―五感で感じられるふくしまづくりをめざして―」の実践である。その概要は2において提示するが、取り扱う具体的な「まちづくり」のテーマは都市景観である。都市景観形成というテーマは、ワークショップのなかだけで完結する問題とは言い難い。それだけに長期にわたる視点で分析を行う必要があるが、ここでは都市景観に関する問題発見＝認知がどのようにワークショップをととして行われていくのかという点に注目しながら事例研究を行う。

したがって、参加の技術としてのワークショップをどのように企画し、実践したのかということを次に報告する。このワークショップでの主な共同作業は「まち歩き」(3)と「井戸端会議」(4)という二つである。これら二つの実践の内容をとりあげ、そこでどのような住民による問題発見が行われたのかということを提示する。

これら一連の作業をふまえ、5では1.1.で示した二つの分析の視点に即した実践の評価を行う。最後に6

において結語を述べる。

この事例研究に際しての方法は、社会調査方法で言うところの参与観察法¹⁾によっている。筆者が企画段階からその実践に関わり、ワークショップ当日においてもファシリテーターとして参加した。また、

4.1.で報告する講演も筆者自身が行っている。

2 「おらがまちづくり市民フォーラム」の概要

2.1. 概要

「おらがまちづくり市民フォーラム」(以下「フォーラム」)は福島県内の建築3団体(福島県建築士会福島支部・福島県建築事務所協会県北支部・日本建築家協会福島地域会)が主催する、「おらがまちづくり実行委員会」(以下「実行委員会」)により1998年度から単年度ごとに行われている²⁾。福島県の「福島県地域サポート事業」の補助を受けると同時に、福島県・福島市等の後援も受けた事業である。その一貫した目的は、主として「まちづくり」に関する啓発を行うことにあり、直接営利を求めるといった性格の事業ではない。

つまりこのフォーラムは、建築関係の職能を持ったメンバーが中心になり、自主的な実行委員会形式で運営されているワークショップである。この実行委員会のメンバーはワークショップ当日の実践も含めて、企画あるいは各種の準備に何らかのかたちで参加する。この2000年度の「五感で感じられるふくしまづくりをめざして」では、のべ25人が実行委員会としての作業に関わった。この他にワークショップ当日のみの協力者も9人いるなど、建築3団体を中心にその運営への参加が行われた。

2000年度の事業として設定された「五感で感じられるふくしまづくりをめざして」というテーマは、1.2.で示したとおり住民による自主的な都市景観形成に向けた啓発を主要な目的としている。筆者は実行委員会から参加を呼びかけられるかたちで実行委員会に加わった経緯があるが、その呼びかけの際に実行委員会から提示された「企画案」の概要は表-1に示される内容であった。この内容からわかるように、当初のテーマは「まちのやさしさ」と「風景」という抽象的な内容を結びつけたものであった。こうしたそれぞれの言葉を平易な言葉に置き換えていく作業がその後の実行委員会における企画会議で検討されていった。

表－1 2000年度「おらがまちづくり市民フォーラム」企画案の概要

(1)テーマ

まちのやさしさを育む風景とは

(2)手法

①おらがまちづくり実行委員会と市民の協働作業で開催する。

②短期的なイベントとして実施するのではなく、継続性を視野に入れて、今回はそのスタートを切るという位置付けで行う。「景観」形成は、短期的には捉え難いからである。

③今回は中心市街地を対象に、まち歩きによる「景観」の点検と将来方向性への提案を行う。

(3)まち歩きのやり方とキーワード

第1ステップ

①建物ウォッチング

②街並みウォッチング

③風景ウォッチング

第2ステップ

①「ふくしまの景観マップ」づくり

第3ステップ

①「ふくしまの景観マップ」展示会

②意見交換会の実施

この実行委員会の企画会議も含めた一連の準備の流れは、表－2に示される

表－2 2000年度「おらがまちづくり市民フォーラム」実行委員会の準備の流れ

9月14日 企画会議

実行体制の確認等

9月22日 「まち歩き」準備打ち合わせ

「まち歩き」のコース設定等

9月28日 企画会議

「まち歩き」のコース設定、テーマの具体化等

10月5日 企画会議

「まち歩き」のコース設定決定、担当決定等

10月13日 「まち歩き」準備打ち合わせ

「まち歩き」のチェックリストとまとめの確認等

10月17日 企画会議

「まち歩き」のコース設定確認等

10月25日 企画会議

「まち歩き」のタイムスケジュール確認等

10月28日 「まち歩き」

「まち歩き」の実践と意見交換等

11月6日 企画会議

「まち歩き」のまとめ、「井戸端会議」の準備等

11月12日 「井戸端会議」

「井戸端会議」の実践等

この表－2のように、ちょうど2ヶ月間に6回にわたる企画会議と2回の「まち歩き」準備打ち合わせを設けた。筆者はこのすべてに出席し意見を述べると同時に、実行委員会の作業を観察した。企画会議は1回約2時間程度であり、この間に主として「まち歩き」「井戸端会議」の企画をかたちづかっていった。あわせて参加者の確保等の運営に関わる事務を行った。

2.2. ワークショップの企画を具体化する過程

この一連の流れのなかで都市景観形成というテーマを具体化したのは、9月28日の企画会議においてであった。この際、フォーラムに先がけて福島県建築士会福島支部女性委員会が9月26日に実施した福島大学教育学部附属小学校第3学年を対象としたワークショップ「まちのやさしさ探し」の報告が行われた³。この報告では『『やさしさ』見つけた』『これではこまる人がいるぞ』『もっとこうなればいいのにな』『こんな町にしたいな』という4点にわたって、子どもたちから提示された意見の概要が紹介された。そのなかではバリアフリーの「まちづくり」を中心に、ごみのない「まちづくり」や「まち」の自然環境の発見などが行われたことが紹介された。

その報告をふまえてこの企画会議で行われた意見交換では、以下のような発言が行われた。

- ・まちなみに対する歴史的観点をもっと導入することはできなかったのか。
- ・生活ということと結びつけて、地元の人たちの話を聞いてみることも大切ではなかったのか。
- ・まちなみと同時に、遠景からの風景ということを「まち歩き」に導入することも大切ではないか。
- ・「まち歩き」を実践するのであれば、誰にでもわかるようなチェックリストを用意すべきだ。
- ・五感を大事にしながら、まちなみなり、風景なりを見ていく感覚を持ってもらうべきだ。

こうした企画会議での意見交換をもとに、実行委員会ではテーマを決定していった。その過程では「まちづくり」ということの内容が極めて抽象的であり、一人ひとりの「まち」に対する認識も異なるなかで、どれだけ参加者が都市景観に対する認識を自分の言葉で表現できるのかということが議論の対象となった。そこで、そうした一人ひとりの認識を引き出すためには言葉で表現しやすくなるツールを用意することと、人間が持っている五感を使うということを意識した方が望ましいという方向で企画をまとめることになった。

こうした意見交換の経緯のなかで「五感で感じられるまちづくり」というテーマが決定された。しかし、この段階で一人ひとりが考える五感というものの内容は、やはり抽象的なままであった。五感すなわち視覚・聴覚・臭覚・味覚・触覚のそれぞれと対応する「まち」の要素とを、直接的に結びつけるというかたちの意見交換が多く、実際の企画においてはその意味づけが未消化であった。この点をふまえつつ、3で示す「まち歩き」ではチェックリストを作成し、実践を行うところとなった。

このテーマの決定を受けて、ワークショップの企画自体は具体的に実践に結びつけて準備されていった。「まち歩き」「井戸端会議」の実施については、当日のスケジュールや担当の決定がなされた。また、参加者の募集は10月28日の「まち歩き」と11月12日の「井戸端会議」とを、両方あるいは片方だけでも出席できる人を公募した。したがって参加者の概要についてはまとめてではなく、3・4のそれぞれでふれることとする。なお先述の福島県建築士会福島支部女性委員会は、このフォーラムにあわせてやはり小学生を中心とした子どもを公募しての「まち歩き」を実施した。

3 「まち歩き」による都市景観認知

3.1. 「まち歩き」の概要

フォーラムにおける第1回のワークショップとして位置づけられたものが「まち歩き」である。そもそも「まち歩き」というのは、普段は「まち」を構成する要素を意識せず生活を営んでいる場合が多いことをふまえ、「まち」を実際に歩きながらあらためてその要素を発見しようという営みである。こうした発見の営みは例えば写真・スケッチ・メモ等に記録しておき、それらを持ち寄って地図等に再構成するかたちでまとめられる⁴。これら一連の作業を共同でこなすことが「まち歩き」というワークショップの方法である。こうした方法は年齢を問わず参加が容易であることから、ワークショップの方法としては極めてオーソドクスなものとして用いられている。

しかしオーソドクスとは言え、その実践においては運営する側及び参加者自身にも、まさに参加の技術が求められる。平たく言えば「まち」を歩いて気づいたことを記録しまとめるという作業であることから、ややもすると「まち」の表層のみをとらえてしまいかねない。「まちづくり」という人間の営みにまでふみこ

んだ発見をするのであれば、その「まち」の歴史と言う文脈や生活構造までを読み取る技術が求められよう。しかしそうした技術を獲得するためには当然、その「まち」への十分な知識等の獲得も必要になるが、そこまでは1回で完結するワークショップの作業としては難しい。そのような場合にワークショップを運営しているファシリテーターの側がある程度は知見を提供する必要があるが、行き過ぎれば参加者の自主的というよりは誘導による発想が生まれかねない。

そうした「まち歩き」の実践の難しい側面に対して、10月17日に行われた企画会議では、表-3に示すチェックリスト（概要）を見てもらうかたちで過度な誘導にならないようにすること、また「まち歩き」の後の意見交換では基本としては「言いつ放し」でもって構わないという点を確認した。

表-3 「まち歩き」のチェックリスト（概要）

視	街並みや風景を 見る	色、光、外観デザイン、樹木、 歴史、生活
聴	街並みや風景の 音を聴く	人の声、鳥の声、音楽、車、機 械、風、川
臭	街並みや風景の 臭いを探す	生活、食べ物、土、川、路地、 風
味	街並みや風景を 味わう	たたずまい、歴史、空気、風、 食べ物
触	街並みや風景に 触れる	素材の質感、歴史、空気、風、 歩道、樹木

こうしたチェックリストやファシリテーターの側の技術の問題は、同時にどのような「まち歩き」のコース設定を行うのかということでも変化するものでもある。この「まち歩き」では福島市を対象としながらも、どこの都市景観について取り扱うのかという点で議論を重ねた。フォーラム自体のメイン会場を福島市中心市街地に設定していたこともあり⁵、基本としては中心市街地の都市景観について取り扱うことが前提であったが、具体的にどこを歩くのかというコース設定では事前の下見等を含めて繰り返し準備が行われた。

このコース設定で特に意識されたことは、中心市街地を実際に歩きながら近景としてその都市景観をとらえるというコースだけではなく、中心市街地を遠景から風景としてとらえるコースを設けるということであった。具体的には海拔の高い位置から中心市街地を見渡すなどの工夫を行い、周辺から中心に向かって「ま

ち歩き」を行うコースを設けるという発想である。こうしたコース設定を行うことにより、後の意見交換が近景・遠景のいずれかに偏らず、様々な視点を共有できると考えた。こうした視点をワークショップに導入するには、地理的条件など「まち歩き」に与えられている条件による制約もあるが、共同作業として様々な認知を共有するという点で意味があるものと考えられる。

以上の企画に加え、ワークショップ当日の参加者数等を考慮して、最終的には表－4に示す四つのコース設定を行った。なお10月28日のワークショップ当日の参加者数は実行委員会のメンバーを含めて全体で124人であり、その職業別構成としては表－5に示される。このなかでは特に一般（視覚障害者）の参加が5人へのぼったことが注目されよう。なお、四つのコースそれぞれの参加者数は表－4に示すとおりである。

表－4 「まち歩き」のコース設定と位置・人数

A コース（天神様界隈コース） 位置：福島市天神町周辺 人数：25人
B コース（お稲荷様界隈コース） 位置：福島市宮町周辺 人数：30人
C コース（西裡寺町通り界隈コース） 位置：福島市中町周辺 人数：34人
D コース（風景ウォッチングコース） 位置：福島市椿山・阿武隈川等 人数：35人

表－5 「まち歩き」参加者の職業別構成

職 業	人 数
建築関係者	46
小学生	24
各種団体関係者	18
行政職員	12
一般	8
一般（視覚障害者）	5
研究者・学生	3
高校生	1
不明	7
総計	124

（注）当日に配付された『参加者名簿』の所属団体により、筆者が独自に分類を行った。

3.2. 「まち歩き」の実践

この「まち歩き」は10月28日に、概ね表－6に示すタイムスケジュールに基づき行われた。

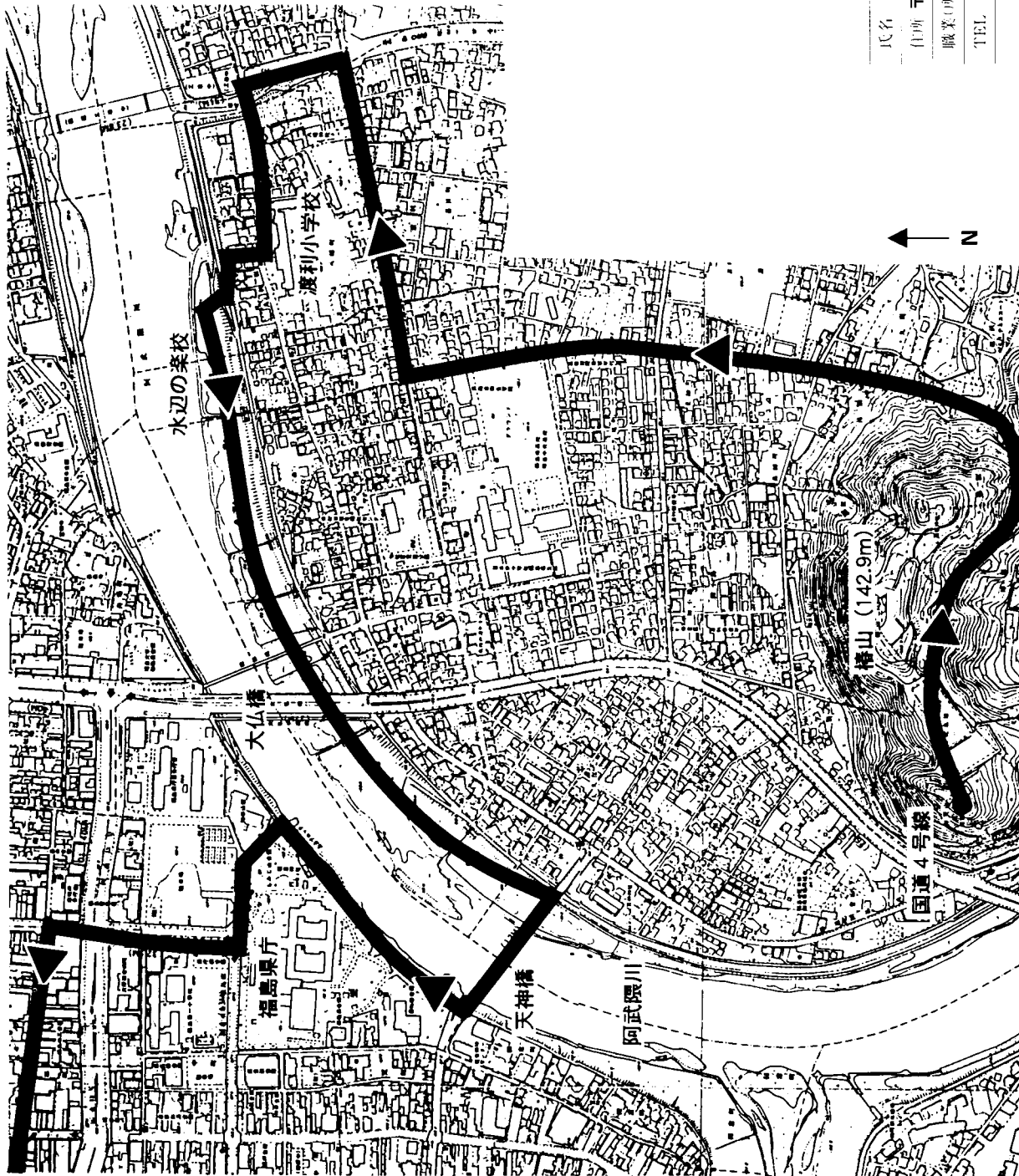
表－6 「まち歩き」当日のスケジュール（概要）

時 間	内 容
12：30	受付開始
13：00	開会 講演（福島市のまちづくりについて）
13：30	各コースごとに集まり説明
13：45	「まち歩き」開始
15：50	「まち歩き」終了 写真現像 参加者は各自意見整理 意見整理が行われた各自の地図をコピー
16：00	意見交換 「井戸端会議」での発表者決定
17：00	閉会

約2時間を予定して行った「まち歩き」では、四つのコースごとに参加者各自が意見を書き込むための地図と全コース共通のチェックリストを配付した。これをもとに参加者は「まち歩き」を行い、地図に感じ取った都市景観の要素を書き込んでいくという作業を行った。その作業をとおして書き込んだ意見を、各自が意見交換というかたちで発表しあった。その際にファシリテーターの側は意見を引き出すことに努め、一つ一つの意見について議論を行うといった認知を深めるための作業は特に行わないように配慮した。このようにすることで反論等をされずに自由に意見を言いやすくすること、またそうした議論は11月12日の「井戸端会議」で深めるべきことを確認していた。なお、意見が書き込まれた地図はコースごとにまとめてコピーを行い、実行委員会の側でどのような都市景観の要素の認知が行われたのか検討するための資料とされた。

本稿では「まち歩き」の実践の一つとして、筆者が参加したDコースの事例を紹介する。先述のとおりこの「まち歩き」の特徴は、遠景からの都市景観に対する視点を導入しようとした点にある。そのためのコースとなったのがDコースである。Dコースの参加者には図－1として示す地図を配付した。この図－1にあるように、Dコースでは椿山を起点として阿武隈川沿いを歩き、中心市街地を見下ろしつつ、山－川－「まち」の連続性をふまえて都市景観を発見しようとした。

D. 阿武隈川コース
(意見を書き込むスペース)



氏名	男・女	才
住所	〒	
職業(所属)等		
TEL	FAX	

図-1 「まち歩き」におけるDコースの地図

このDコースの「まち歩き」ではまず椿山から中心市街地を見下ろした。この位置から見た中心市街地の景観は写真－1のとおりだが、この際には中央に写る信夫山の福島市におけるランドマークとしての位置づけや、建築物等の色彩が不統一であることなど主に視覚に関する意見が聞かれた。その他の五感に引きつけようとした発言では「自動車の騒音が聞こえる」「木々の臭いがする」等の話し合いがなされていた。



写真－1 椿山から見下ろした福島市中心市街地

次にDコースでは阿武隈川沿いを歩いた。阿武隈川は福島市中心市街地にとって身近な自然環境が残されており、「水辺の楽校」と呼ばれるビオトープの試みもある。「まち歩き」ではそうした自然環境によって構成されている都市景観についても発見しようとした(写真－2)。また、かつての船着き場といった歴史的資源も残されている。写真－3は修復された堤防を見ているものである。中央のつえを持っている参加者は視覚障害者であるが、堤防の石垣の手触りを確認している。



写真－2 阿武隈川「水辺の楽校」を見る参加者



写真－3 石垣の手触り確かめる参加者

この「まち歩き」では写真－3に象徴されるように、視覚障害者の参加が健常者には気づきづらい五感の視点を与えてくれていた。手触りによる確認だけではなく、阿武隈川の流れの音の違いにより水深の高低や流れの緩急を聞き分けているといったことが聞かれた。

Dコースの「まち歩き」は以上のように中心市街地を遠景で見るように進められた。「まち歩き」を行いながら各自が書き込んだ意見は持ち帰り整理し、写真－4のようなかたちでの意見交換において発表された。



写真－4 Dコースの意見交換の様子

3.3. 「まち歩き」により認知された都市景観

以上のDコースを含めて四つのコースで提示された参加者の意見は、地図のコピーをもとに実行委員会により集約がなされた。その各コースごとの意見の整理については、11月12日の「井戸端会議」の資料としても配付された。

ここでは「まち歩き」により各コースで、どのような五感をとおした都市景観の認知がなされたのか、先のチェックリストにも即して紹介しよう。なおここで

の紹介は各コースごとに年齢の順だが、Bコースに限っては年齢の記録がない。またB・Cコースについては、女性からの意見の提示がなかった。

A コース

男・31才：とおりに面してコーヒー豆屋さんがあり、コーヒーの香りがよい。

男・40才：天神様の参道は正面に信夫山が見え、景観的によい。しかし電線が景観を邪魔している。

女・44才：肢体不自由児通園療育センター前の小さな公園はきれいだが、いつ行っても子どもが遊んでいる姿を見たことがない。今日もいなかった。

女・48才：ビブレ前の交差点の足元はやさしい感じがする。ただし、色使いには工夫が必要。

B コース

男・不明：稲荷神社界隈の路地は生活の臭いがして、魅力がある。

男・不明：まちから見た周辺の山の風景はよい。

男・不明：稲荷神社から信夫山と吾妻山が見えるようなまちづくりが必要。

男・不明：並木通りは整備されているが、歩道はせめて二人並んで歩けるようにしてほしい。

C コース

男・23才：この界隈は蔵のある風景で、歴史を感じさせる。

男・28才：後世に残したい旧日銀支店長宅が残ったことはよかった。

男・38才：常光禅寺の寺町界隈はタイムスリップしたような空間。

男・42才：この界隈には、福島市にもよいところがあったという感じである。

D コース

男・11才：椿山からはビブレやイトーヨーカドーなどの大きな建物が目立つ。

男・29才：山・川とまわってきたせいか、まちのな中は騒々しく感じられた。逆に活気があるということか？

女・32才：屋根の種類も瓦やトタンなど統一感がない。福島駅周辺はビルが多いが、県庁所在地にしてはさびしい。県庁のまわりは木が多くきれいだった。

男・35才：河川敷対岸の景観を整えるべき！樹木が少なすぎる。

これらの意見のなかには、各コース内で重複して見られるものもあった。ここには五感ということと関連づけた意見をあげているが、Aコースでは、「天神様」とその借景としての「信夫山」という視点での都市景観認知が目立った。また、「公園」そのものを見るのではなく、そこで遊んでいるはずの子どもに着目した認知が行われていたことも特徴としてあげられる。

Bコースでは「信夫山」だけではなく、「吾妻山」を福島市のランドマークとして認知している意見が複数見られた。また、旧来からの中心市街地を歩くコースであったことから、「路地」と「生活」とを結びつける意見も散見された。

Cコースでは「寺町」あるいは「旧日銀支店長宅」といった歴史を感じさせる都市景観認知に関する意見が目立った。そのなかで「よいところがあった」という、この「まち」を過去のものとする意見があったが、「古き良き」と過去を切り取るのではなくこのように現代との接点で都市景観を認知する視点が見られた。

そしてDコースでは遠景から見た都市景観に関する意見として、特に目立つ建築物についてふれたものが多かった。また歩いてきた山や川といった自然環境が連続していないことをとりあげ、その解釈にふれた意見もあった。

こうして見ると、この「まち歩き」をとおして認知された都市景観としては、単に表層にある建築物等の様子だけではなく、借景や近景－遠景の対比、さらには歴史的資源の発見といった様々な内容があったように思われる。この背景にはチェックリストや地図など参加の技術に関わるツールが利用されたというだけではなく、参加者相互の「まち歩き」をとおしての話し合いにより生まれてきた発想があることも指摘される。

そしてこれらの意見をもとに、4で示す「井戸端会議」では横断的な議論がなされていった。

4 「井戸端会議」で語られた都市景観

4.1. 講演「五感で感じられるまちづくりをめざして」

11月12日の「井戸端会議」は三つの内容から構成された。それは、(1)筆者が行った講演「五感で感じられるふくしまづくりをめざして」、(2)「まち歩き」参加者による報告、(3)意見交換会「井戸端会議」である。

このうち筆者が行った講演では先の「まち歩き」をふまえ、表-7に示される内容を30分間で述べた。

表-7 講演「五感で感じられるふくしまづくりをめざして」の内容（概要）

- 1 まず、まちと向き合うことからタウンウォッチングをとおして—
 - ・まず「まち」と向き合うことの必要性について
 - ・「まち歩き」で感じたことの確認
- 2 心でまちを感じよう
 - ・視覚だけでなく心でとらえる「景観」
 - ・スライドによる福島市の景観
- 3 私たちの心のなかにある景観
 - ・心象風景としての景観についての問いかけ
 - ・「ふくしま まちなか 小学校校歌マップ」説明
- 4 まちづくり・都市計画が引き出す「よい心」と「わるい心」
 - ・いままでになぜ心に残る景観が失われてきたのか
 - ・人と「まち」を大切に作る心を育てる大切さ
- 5 五感で感じられるまちづくりのために一わかりやすいことばで語ること—
 - ・五感で感じたことを言葉に置き換える必要
 - ・平易な言葉での語りが五感で感じることの始まり

この講演で留意したことは「五感で感じられるまちづくり」や、都市景観に対する考え方を一方的に提示あるいは誘導しないということである。都市景観を五感で認知するといっても定式があるわけでは決していない。そこでスライドやテキストとしての小学校校歌を用いた都市景観認知の方法を紹介しつつ、参加者に「まち歩き」の経験も反芻してもらいながら、「五感で感じられるまちづくり」ということを問いかけた。

つまり表-7に示すこの講演の内容は単に筆者が述べたことの記録としてではなく、この一連のワークショップにおける問題整理の役割があったのである。

4.2. 「井戸端会議」における議論

講演に続いての四つのコースごとに「まち歩き」の結果を報告しあった。「まち歩き」当日の意見交換の際に各コースごとに報告者を決めており、この報告ではそれぞれの報告者が事前に選んだスライド等を用いて、「まち歩き」に対する感想などを報告した。なお、参加者については、「まち歩き」に参加しても「井戸端会議」への参加は任意としていた。しかし、その両方に参加した者が多数見られた。

この報告では各コースから、以下のような報告が聞かれた。コースそれぞれで出された意見を集約したかたちでの報告が行われていた。

A コース

- ・知らない路地を発見した。
- ・保健福祉センター裏のノーマライゼーションゾーンをはじめて知った。
- ・唯一五感で感じたのはコーヒー屋さんだった

B コース

- ・景観・活性化・安全性など考えるキーワードが多く感じた。
- ・歴史のある店などノスタルジィだけでなくアイデンティティの問題で考えたい。

C コース

- ・興味深い建物がいっぱいあるがそれらが雑然としていた。
- ・意外にいいところがあり歩かないとわからない
- ・あるものを生かすことが大事。

D コース

- ・屋外公告が景観を壊している。
- ・阿武隈川の歩道をもっと自然を感じられるようにしてほしい。
- ・人がどこに行ってもいない感じがした。

次に、意見交換会を「井戸端会議」と称して行った。「井戸端会議」と称したのは、参加者の自由な発言を期待し堅苦しくないものにしようとしたためである。

この「井戸端会議」の議論は約1時間30分にわたり行った。筆者はそのコーディネーターを担当したが、当初の目的どおり自由に「五感で感じられるふくしまづくりをめざして」というテーマに即しながら発言を求めた。特に発言の内容を誘導するなどせず、参加者相互の意見交換が行われるように配慮した。

この意見交換のなかで提示された論点と、そのなかでの意見としては以下のようなものがあった。

この「まち」は五感で感じられるようなまちの要素を提供しているのか

- ・住みよいまちだと思っている。しかし、福島にはお客さんがきたら案内するような顔がない。公園などもなく一人ひとりが集まる場所もない。
- ・65年間、福島市に住んできて愛着がある。しかし、住みよい「まち」イコール変化がないということでもないと思っている。

「五感で感じられるまちづくり」とは

- ・「五感で感じられるまちづくり」とは結局は原風景をどうするか、生活のなかで感じられるものを

自分がどう意味付けるかということではないのか。

- ・そんなに難しく考える必要があるのか。「五感で感じられる」ということは、その「まち」が「好きだ」という感覚でよいのではないだろうか。

これから何をすべきか

- ・自分が発言したことに責任を持って行動していくということが第一歩ではないか。効率的な「まちづくり」のルートというものはないのではないか。
- ・今回参加してみて、目の不自由な人たちといっしょに「まち歩き」をしたことがよかった。目で見える以外の景観のとらえ方があった。

4.3. 都市景観を平易な言葉でどう表現するか

以上の「井戸端会議」当日の一連の報告・意見交換をふまえると、主に以下の三つの点が参加者には認知されていたものと考ええる。

第一は「何をどのように発見したのか」ということである。空間（都市構造）と時間（歴史）の拡がりという点に加えて、「歩いてみないとわからない」という五感をとおしての発見が、わずかながらではあるが認められていたように思う。

第二は自らが『まち』とどうつきあうのか」という視点である。「建物」や「路地」といった「まち」の表象だけではなく、「まち歩き」の報告として「人がどこに行ってもいい」といった、生活する人へのまなざしが語られている点にその視点を見出せよう。

第三は「まちづくり」というものに対して、「一人ひとりができること」への言及である。「あるものを生かす」といった地域の資源を活用しようという発想などに、「まちづくり」の主体としての視点が提示されているものと考ええる。

そして、このフォーラムのテーマである「五感で感じられるふくしまづくりをめざして」との関連であるが、このテーマ自体が認知した都市景観を具体化する手がかりになったと思われる報告・意見も見られた。視覚だけではなく他の感覚に引き付けようとした報告・意見である。

しかし意見交換のなかでは「五感で感じられる」ということを、都市景観を原風景つまり心象風景としてとらえるのか、あるいは単に好む・好まないといった感覚としてとらえるのかという議論に展開した。これは「五感」という抽象的な内容を、より具体的にしていくための契機となる議論とも見られる。だが、ワークショップの企画であらかじめ具体的に解釈され、参

加者に提示されてしかるべき内容でもあった。

つまり、そもそも都市景観という抽象的な内容をどれだけ「まちづくり」との関連で平易な言葉で表現することができたのかという点では、このワークショップの未消化の部分が残される。筆者が行った講演ではいかに平易な言葉で「五感」で感じた都市景観を語るかということに重点をおいた。しかし、特に「井戸端会議」のなかではこの点を参加者にふまえてもらい、議論を展開するまでには完全には至らなかったと見るべきであろう。

5 都市景観形成とワークショップ

5.1. 実践の方法としての妥当性

以上のようにこのフォーラムにおけるワークショップの実践について報告してきた。ここでは実践に対する評価として、まず「まちづくり」ワークショップの方法としての妥当性について見ておこう。

このフォーラムにおけるワークショップでは、都市景観形成に向けての問題発見＝認知ということに目的をおいていた。そのための具体的なとりくみとしては、「まち歩き」があった。この「まち歩き」では四つのコースに分かれて、それぞれが「五感で感じられる」というテーマに即しながら都市景観を構成する要素を発見する作業を行った。

こうしたテーマに即しながらという作業を行うためにワークショップの様々な企画が立案されたが、特に検討の対象とすべきは、チェックリストと地図という考えるためのツールの提示が適切であったのかという点である。この二つのツールについては表-3・図-1として示したとおりであるが、これらが「五感で感じられる」という抽象的な内容を、どれだけ具体的な内容に変換するツールとなったのかということについては、なお検討の余地が残される。

チェックリストについては五感ということをやはり個別に認知させる内容にとどまるものであったという批判がある。「五感で感じられる」ということをとおして、都市景観を具体化する手がかりは得られたものと考えるが、一方でチェックリストのように、個別化された五感をとおしての意見が見られたことには注目をしておく必要がある。「井戸端会議」における筆者の講演では「五感で感じられる」ということを、「心でまちを感じよう」というトータルなとりくみとして提示し直した。しかし、ワークショップの企画の当初

から、実行委員会においてやはりあらかじめ五感ということについてトータルな見解を用意し、参加者に投げかける方法の吟味を深めておくべきであった。

地図についても認知したことを場所と対応しながら書き留めるという、ツールとしての役割を十分に果たしたかどうかという点で評価をしておく必要がある。図-1で見たように場所と対応しながら意見を書き留める地図であったものの、具体的な場所と関連づけた記述という点では3.3.に示す意見にも見られるように、決して多数を占めるという結果にはならなかった。都市景観形成という目的を考える際に、単なる印象の範囲から具体的な場所との関連での記述を求めるといった、より言葉として語りやすくするためのツールとして地図を位置づけ直す企画も必要であった。

こうしたツールを用いた「まち歩き」から「井戸端会議」という二つのワークショップの流れについては、前者の結果を後者に連続させるという点で、参加者にもわかりやすい企画となっていた。しかし4.3.でも見たように、やはり「五感で感じられる」ということの意味を「井戸端会議」という実質的な議論に委ねれば、その設定自体が問い直されるべきものとなった。啓発というこのフォーラムそのものの趣旨をふまえれば、「井戸端会議」における議論自体を特に一定の方向に結論づける必要はない。しかしこれからの都市景観さらには「まちづくり」というものを、どのように一定程度のビジョンとして共有していくのかという点では、ワークショップとして企画からその結論に至るまで、十分な整理が必要であった。

当日の進行といったワークショップの運営そのものは、参加者から特に疑問が呈されるということとはなかった。「まち歩き」は概ね表-6に示す日程どおりに行われ、「井戸端会議」についても参加者の発言の時間を十分に確保しながら行うことができた。ワークショップの運営自体については、内容を目的どおりに消化できたという点で、一定程度の評価がなされよう。

5.2. 実践の「まちづくり」としての継続性

5.1.で行った評価はワークショップの企画から当日の実践に至るまでの内容に対するものであった。いわゆる「まちづくり」ワークショップ、とりわけ都市景観形成という長期にわたるとりくみが必要なテーマについては、今後の「まちづくり」に向けてどのような継続性に関する議論を提示し得たのかということを検討しておく必要がある。

3.3.で見た「まち歩き」で感じたことからまとめられた意見や、4.2.で見た「井戸端会議」における議論のなかでの意見では、これからどのようなとりくみをしていくべきなのかということが、あまり見られなかった。「井戸端会議」における議論では「これから何をすべきか」ということも論点の一つにはなったが、「自分が発言したことに責任を持つ」あるいはバリアフリーへの関心など、いわば総論としての意見交換にとどまった感がある。

このワークショップでは具体的なアクションプランをつくるといった結論づけを目的としていなかった。しかし、このワークショップをとおして例えば今後も都市景観形成について議論をしていくためのネットワークをつくるなど、何らかの展開の仕方を用意することも議論される必要があったと思われる。「言い放し」の意見のなかから都市景観形成さらには「まちづくり」への新たな発想が生じることも考えられるだけに、そうした過程を意図しつつ企画を用意することがこのワークショップではやや希薄であった。

だがこのワークショップをとおして、都市景観をどのように読み取っていけばよいのか、といういわゆる「まちづくり」教育に関わる側面の効果は参加者に対してあったものと考えられる。筆者はかつてワークショップの機能を「まちづくり教育」段階と「実質的計画策定」段階の二つにカテゴライズしたことがあるが¹⁰⁾、将来の都市景観形成という営みに向けて参加者を啓発するという「まちづくり教育」としての目的はこのワークショップでも果すことができたと考えられる。その点については、「まち歩き」の際の意見交換で様々な視点の獲得がなされたことが報告されていたとおりであり、今後、参加者がこうした視点の幅をさらに広げながら都市景観形成に関心を寄せていくことが期待される。とりわけこのワークショップに参加していた多くの小学生が、年齢を経るにつれてさらにどのような都市景観への視点を獲得していくのかということは、継続してパネル調査等を行うべき課題である。

表-1に示したように、実行委員会の当初の企画案では、手法としてこのワークショップ以降のとりくみに継続性を持たせること、将来方向性への提案を行うこと、という2点が盛り込まれていた。しかし、「まちづくり教育」段階として評価すべきではあるが、この2点に関連して十分な企画を用意していたとまでは言い難い。その意味では、このワークショップの参加者が自主的に都市景観形成へのとりくみを展開してい

くことに期待が集まるが、さらに今後同様のテーマのワークショップを実践し、そのなかで継続性ということに重点をおいた内容を用意することも必要である。

6 おわりに

本稿では「おらがまちづくり市民フォーラム—五感で感じられるふくしまづくりをめざして—」を事例として、都市景観形成におけるワークショップの実践について検討を行った。その実践の後の継続性や「五感」というキーワードの提示の仕方等については、5で見たように課題が残された。

対して「まち歩き」「井戸端会議」により、抽象的な「まちづくり」に関わる内容を体験と意見交換をとおして参加者にわかりやすく提示できた点で、ワークショップとしての有効性が認められること等が示された。今後の研究では参加者によるワークショップの評価等も含めて、さらに長期にわたる都市景観形成といったテーマと、平易なかたちでの住民の参加の技術について検討していく必要がある。

謝辞

本稿はおらがまちづくり実行委員会、ワークショップに参加されたみなさんとの共同作業によりまとめることができました。記して感謝いたします。

補注

- (1) 問題関心を抱いた集団などにメンバーとして参加しながら観察を行う社会調査方法の一つ。ここでの観察項目は主として運営する側による住民の問題発見のための企画に関する議論と、ワークショップ当日の住民の発言内容という2点とした。
- (2) なお1999年度の事業は「まちのやさしさを検証する」というテーマで福祉のまちづくりについてとりあげている(引用文献11)。
- (3) 福島県建築士会福島支部女性委員会の子どもを対象として行った実践については、引用文献12)にまとめられている。また、福島民友新聞2000年9月27日付等も参照されたい。
- (4) 例えば、世田谷まちづくりセンター(引用文献13))による絵地図づくりの実践等が紹介されている。
- (5) このフォーラムは、「まちづくり」に関する各種団体による「どうすっぺふくしま博覧会実行委員

会」主催の「どうすっぺふくしま博覧会」における催事の一つという位置づけもある。この「どうすっぺふくしま博覧会」が主に福島市中心市街地の活性化をテーマに催事を企画していることもあり、フォーラムも中心市街地での企画となった。

引用文献

- 1) 石田頼房(1987),『日本近代都市計画の百年』,自治体研究社 p. 306-308
- 2) 安藤元雄(1978),『居住点の思想 住民・運動・自治』,晶文社 p. 77-80
- 3) 岩見良太郎(2000),「建設省の『まちづくり』」,区画整理・再開発対策全国連絡会議編集・発行『区画・再開発通信』通巻361号 p. 12-13
- 4) 松野弘(1997),『現代地域社会論の展開—新しい地域社会形成とまちづくりの役割』,ぎょうせい p. 113-117
- 5) 渡辺俊一編著(1999),『市民参加のまちづくり マスタープランづくりの現場から』,学芸出版社 p. 7-14
- 6) 今西一男(1998),「個々の権利と『まちづくり』の接点を問う」,自治体問題研究所『住民と自治』 p. 80-83
- 7) 延藤安弘・横山俊祐・森永良丙(1989),「価値づくりの計画としてみた個性的な住戸平面の評価—ユーコートの特質とその計画原理(2)—」,日本建築学会計画系論文報告集第406号 p. 87-99
- 8) 早田宰・佐藤滋(1995),「住環境整備事業における目標空間イメージの合意形成プロセスに関する研究」,日本建築学会計画系論文集第473号 p. 101-111
- 9) 渡辺, 前掲書
- 10) 今西一男・垣内典之・藤島麻美他(1996),「まちづくりワークショップにおけるゲーム活用に関する研究報告」,千葉大学工学部研究報告第48巻第1号通巻第93号 p. 17-28
- 11) おらがまちづくり実行委員会編集・発行(2000),『「おらがまちづくり市民フォーラム」の記録—まちのやさしさを検証する—』
- 12) 福島県建築士会福島支部女性委員会編集・発行(2001),『建築と子供たちチャレンジ講座 PART. 1』
- 13) 世田谷まちづくりセンター編集(1995),『わが町発見! 絵地図づくりからまちづくりへ』,晶文社